# 小学校教育における子どもの思考のプロセスを可視化する ドキュメンテーションについての研究 ―Emergent Curriculum in the Primary Classroomの実践分析を通して―

小栗　愛未
（愛知教育大学　教育学研究科）

A Study of Documentation to Visualize Children's Thinking Process in Elementary Education.

Ami OGURI
(Graduate Student, Aichi University of Education)

## Ⅰ．はじめに

日本における主な教育課題として、「不登校児童生徒の増加」「自然体験の不足」「自己肯定感の低さ」等が危惧され続けている。その中でも中心となる教育課題は「自己肯定感の低さ」ではないかと言える。自己肯定感に関する国際比較研究の中でも、日本人の若者の自己肯定感の低さが指摘されている。田中は「国際比較による日本人の自己肯定感の低さは、文化に適応するための自己呈示の方略や単なる測定方法による問題である可能性が高い。」とし、調査協力者自身により洞察可能な自己満足度の基準をポジティブ思考・ネガティブ思考の類型の 4 類型を設定し分析を行った。結果は、調査協力者の中には、１００％自分に満足している者はおらず、ポジティブ思考・ネガティブ思考の類型の 4 類型の中では“自己嫌悪感が強く、物事を否定的に考える群“が最も自己肯定感の平均得点が低くなったという [1]。また、文部科学省（以下、文科省とする。）が令和４年度に行った「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」によれば、不登校児童生徒数は１０年連続で増加し、不登校児童生徒数の５５．４％の不登校児童生徒が９０日以上欠席している実態が明らかとなった。「児童生徒の休養の必要性を明示した義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」の趣旨の浸透の側面等による保護者の学校に対する意識の変化も考えられるが、長期化するコロナ禍による生活環境の変化により生活リズムが乱れやすい状況が続いたことや、学校生活において様々な制限がある中で交友関係を築くことが難しかったなど、登校する意欲が湧きにくい状況にあったこと等も背景として考えられる。」[2] ということである。これらより、自己肯定感の低さが何をしても自分に自信が持てず、自分のよさや自分に関わる全ての人・もの・事象のよさを実感することができずに、不登校へと繋がったり主体的に学び行動することに不安を感じたりする人になってしまうことが分かる。

子どもが自分に自信を持ち得る瞬間について、多くの教師は認知しているかもしれないが、その具体的なプロセスについては検討できていないのではないか。そのため、子どもの実態を把握しきれず、子どもの成長が見過ごされている懸念がある。個別最適な学びが求められる現代、子どもの成長を見取り子どもの思考や学びのプロセスを可視化することの必要性について考察することは、重要な課題である。

子どもの成長を見取り子どもの思考や学びのプロセスを可視化することのできる教育的アプローチとして、「レッジョ・エミリア・アプローチ」が大きな効果を発揮すると考える。レッジョ・エミリア・アプローチとは、現代「世界最高の幼児教育」として世界中から注目を浴びている幼児教育法である。リナルディは、「われわれの眼に映るレッジョ・エミリアは、希望の使徒である。その胸に抱かれているのは、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ（Deleuze.G.）」の語を用いていえば、「世界への信頼」である。」と言う [3]。

本稿では、レッジョ・エミリア・アプローチより示唆を得て、子どもの成長を見取り子どもの思考や学びのプロセスを可視化することのできるレッジョ・エミリア・アプローチの 1 つの方法であるドキュメンテーションを中心に取り上げる。こ

の方法が、小学校教育における子どもの成長を見取り子どもの学びのプロセスを可視化するために与える教育的効果について明らかにすることを目的とする。ドキュメンテーションから子どもの成長を見取り子どもの思考や学びのプロセスを可視化することのできる瞬間を考察する視点として、活動を繰り返すごとに変容する子どもの思考に着目したい。教師が子どもの成長を見取り子どもの思考や学びを認知するプロセスにおいて、いかに可視化することが子どもの成長や学びのプロセスを認知しやすくするのかを検討の核としたい。

本稿においては、Carol A. Wien の Emergent Curriculum in the Primary Classroom; Interpreting the Reggio Emilia Approach in Schools 第１章“Emergent Curriculum”や第８章“ The Stretching Starfish Children’s Theories”を基本資料とし[4]、ドキュメンテーションについての詳細や、その実践事例について提示し、ドキュメンテーションにおける子どもの成長の見取りや子どもの思考や学びの認知のプロセスついて明らかにしていく。本資料は、Wien が、レッジョ・エミリア市とは異なる視点から、レッジョ・エミリア・アプローチを用いた資料であり、我が国の小学校教育におけるそのアプローチの活用に示唆を与えるものだと考える。

## Ⅱ．先行研究の検討

先行研究としては、神谷の「小学校高学年における「ドキュメンテーション」の検討」が挙げられる[5]。なお、管見の限りだが、我が国における小学校教育に関わるドキュメンテーションについての研究は神谷の論文のみである。神谷は、日本でも、保育・幼児教育の世界で、「ドキュメンテーション」の実践が広がりつつあるが、小学校での実践はあまりされていないという。そこで神谷は、ドキュメンテーションが「傾聴の可視化」と意味解釈されるようになった現代において、小学校高学年におけるドキュメンテーションの検討に焦点をあて、小学校高学年でドキュメンテーションが実施されない理由が定かではない中、小学校におけるドキュメンテーションの活用の可能性を検討した。神谷は、研究方法とその目的として、お茶の水女子大学附属小学校で研究開発の途上にある小学校高学年の「てつがく創造活動」においてドキュメンテーションを活用した実践を試みた。

「てつがく創造活動」とは、お茶の水女子大学附属小学校が新領域として新たにはじめた取り組みである。その成り立ちは、興味と探究を基盤として行うもので、取り組み前までは「創造活動」として行われてきた個々の学びと協働的な活動をプロジェクト型の学びとして再構成したものと、問いを立て自明と思われる価値や事柄について探究するてつがく対話から構成される。神谷の研究は実践の途上ではあるが、子どもや教師、保護者にどのような変化が生じたのか分析し、実践から得た成果と課題をもとに、小学校高学年におけるドキュメンテーションの可能性についての考察を深めた。

神谷は研究を通して、「傾聴の可視化」の困難さを明らかにし、傾聴することの価値付けを試みた。また、ドキュメンテーションの実践に関わる教師の役割の検討とその検証の難しさも明らかとなり、小学校高学年におけるドキュメンテーションの試行的取組を経て、実践の可能性の兆しが見えてきた。その可能性として神谷は、子どもたちがドキュメンテーションを作成することは「assessment as learning」として、自分自身の学びを振り返り、自分たちの活動をメタ的にとらえる活動として有効であると考え、その営みが「自分たちの学びに傾聴する」ことなのかという検討課題も明らかになった。

一方本研究では、神谷の研究のような一つの領域ではなく、教科を含めた学校生活においてドキュメンテーションを活用することで、学びや成長を可視化し、小学校教育における子どもの成長を見取り子どもの思考や学びを可視化することでそのプロセスが認知しやすくなるのかについて検討していく。

## Ⅲ．レッジョ・エミリア・アプローチ

### １．レッジョ・エミリア・アプローチの歴史

レッジョ・エミリア・アプローチは、北イタリアのレッジョ・エミリア市が１９６０年代から所有・運営している、生まれてから６歳までの子どもを対象とした全４６のセンターからなる自治体のシステムに基づいて始まった背景をもつ。第二次世界大戦後、１９５０年代後半から１９９４年の間 Loris Malaguzzi が亡くなるその時まで指導し、現在レッジョ・エミリア市には子ども時代を研究する国際センター[6] があり、スタディーツアーや会議を通じて、８０ヵ国以上と継続的な交流を続けている。

レッジョ・エミリア・アプローチを研究している教師たちは、発達段階に応じた実践と探究に基

づく構成主義的教育を重視する教師である彼らは、レッジョ・エミリア・アプローチが伝統的な学校で働いている時でも、自分たちの指導をより拡大し、豊かにする方法を見出すことに成功した。レッジョ・エミリア・アプローチは世界中の多くの社会で、保育レベルの幼児教育に鮮明な影響を与えたが、小学校教育はその影響を受けにくかった。また、レッジョ・エミリア・アプローチの方法はほとんど認知されていないのが現状である。レッジョ・エミリア・アプローチの中心的な側面を機能させることで、幼児期の価値観と実践が、政策領域において優勢にもかかわらず、小学校で維持され促進される側面をもつ[7)]。

さらに、レッジョ・エミリア・アプローチを学ぶ人たちが、市民権と思いやりを築き、民主的なプロセスを発展させることに非常に関心を抱いているという側面もある。そんな歴史的背景をもつレッジョ・エミリアという都市は、市民の参加と責任に大きな期待を寄せ、急進的に高度で進歩的な社会民主主義的市民形態を発展させたため、民主主義の場としての学校に与える影響は、現在、公立学校教育に関する多くの主流的な法理論とは根本的に異なるシステム機能の在り方を示唆し、標準化されたカリキュラムに押されながらも、学校では説得力のあるエマージェント・カリキュラムを作り上げてきた。学校におけるエマージェント・カリキュラムの開発に関する洞察を共有することには、「幼児に対する模範的な教育実践を知ること」「レッジョ・エミリア・アプローチの影響が、公立学校の環境にも及んでいること」「子どもたちに責任ある市民としてのビジョンを提供する民主主義的な参加型教育を知ること」「教師と子どもにとってのポジティブな愛着、アイデンティティ、学習の相互関係を共有すること」「エマージェント・カリキュラムの十分な理論をから他の人たちがその指導を模倣できるようになること」の５つの目的が隠されている[8)]。

## ２．エマージェント・カリキュラムとは

エマージェント・カリキュラムとは、どんなカリキュラムなのか。エマージェント・カリキュラムは、北米では長い伝統があり、多くの構成主義的アプローチがあり、進歩主義的な哲学の影響を受けた、創造的で思慮深い教師たちの根本的な運動として始まった。複雑で洗練された教育実践に対する新鮮な用語とし、意図的に従うべきコース、論理的な計画とその正反対にあるように見える創発的で無計画なプロセスである概念を結び付け、複数の学習・創作方法を通して行われるため、そこからアイデンティティや教室市民としての新しい文化が発展していく。

このように、エマージェント・カリキュラムは一見逆説を捉えているようであるが、カリキュラムという言葉を使うことで意図的なコースが暗示され、ラテン語の currere に由来し「コースを走る」「既知のルートを回る」という意味をもっている。また、公立小学校におけるエマージェント・カリキュラムの作成は、支配的な教育実践ではないが、それでも北米の多くの都市や町で行われ、教師がグループの興味や関心に応えて計画を立てることで、カリキュラムは子どもたちと教師が一緒になって実生活のある側面を理解しようとする参加型共同学習者となり、真の探究へと広がっていくことのできるカリキュラムとなる[9)]。

しかし、エマージェント・カリキュラムの進路は最初から決まっているわけではなく、問題の理論の結果として、その軌跡が展開される中で複数の繋がりから進むべきプロセスを協働的に作り上げていく中で、特定の繋がりが発展していくのが特徴である。

例えば Nancy Thomas のある授業では、彼女と子どもたちが学校の裏手の空き地を歩いていたとき、鳥が羽を引きずっている様子に気づいた。地面に積まれた古いレンガの中から、子どもたちが卵を見つけた。この発見は、その後の数週間、観察、スケッチ、カモフラージュの絵、そしてメダカとその卵に焦点を当てた読み書きと計算の活動に繋がった。このことから、エマージェント・カリキュラムとは、世界を知るために子どもたちと教師が一緒に参加する中で出会うものと関係を築くことだと言える[10)]。

ここまで、Wien の論述に基づいて、レッジョ・エミリア・アプローチのエマージェント・カリキュラムについて概説してきた。Wien によるとそもそも、レッジョ・エミリア・アプローチは模倣すべきモデルでも、実施すべきプログラムでもなく、レッジョ・エミリア市が幼児教育のためにプレスクールで作り上げてきた、その土地と人々の文化的背景、言語、歴史、地理、政治的・経済的生活特有のものであるということを意識しなければならないという。

Wien は、あくまで自国の学校文化の中でレッジョ・エミリア市とは異なる実践を試みている。彼女は、レッジョ・エミリア・アプローチの考え方や哲学を、かれら自身の実践を見直すきっかけとし、その考えや実践を参考にしながら、かれら自身の教育や学習の実践を再構築し、それを自分たちの文化、言語、場所、時間に合った解釈をして

いるにすぎないという。彼女は、「学校におけるレッジョ・エミリア・アプローチ」ではなく、特定のレッジョ・エミリア・アプローチの考え方が私たち自身の学校教育の文化とかみ合うように解釈されたときに生まれた新しい教育と学習の実践にこそ、エマージェント・カリキュラムという言葉が最も適していると言えるのではないだろうかと主張する[11)]。

### ３．レッジョ・エミリア・アプローチの貢献

レッジョ哲学の要となるのは、子どもと教師が有能で臨機応変であり、自分自身の経験の力強い主人公が子どもであるというイメージだが、このイメージそのものが標準化され、規定化され、定型化され、「教師に立証」されたプログラムが、子どもたちや教師の創造的な可能性を引き出すためには不十分であることが予想されている。レッジョ・エミリア・アプローチの能力において中心的なイメージは、あらゆる学習場面における関係性、互恵性、協働性を強調する拡大的な価値観の３つである。さらに、レッジョ・エミリア・アプローチを経験した者には特別な影響を与え、学校における教育実践をさらに考えさせる、豊かな経験の主人公としての子どもたち、生命体としての学校や社会に参加する子どもの権利、消費者であるだけではなく文化の創造者である子どもの権利という、３つの大きな考え方を与えた。

これらの大きな価値観（関係性、互恵性、協働性）、そしてこれらの大きな考え方（豊かな経験の主人公としての子どもたち、生命体としての学校や社会に参加する子どもの権利、消費者であるだけではなく文化の創造者である子どもの権利）は、教師の仕事を形作るのに役立っている[12)]。

しかし、レッジョ・エミリア市がどのようにしてこのような優れた学校を作り上げたのか、世界中の教育者たちとレッジョ・エミリア・アプローチの経験者との交流を通して分かち合おうとしなければ、私たちはレッジョ・エミリア・アプローチをほとんど理解できないだろう。この共有の中でレッジョ・エミリアの教育者たちが行った実践から、Wien はエマージェント・カリキュラムを構成するうえで、「第３の教師としての環境という概念」、「教育学的ドキュメンテーション」、「学習の１００の言葉」、「授業デザイン（progettazione）」の、４つの視点がエマージェント・カリキュラムの十分な理論を構築する鍵となることを明らかにしてきた[13)]。

本稿では、教育学的ドキュメンテーション（以後、Wien の定義するドキュメンテーションに相当するものを、「教育学的ドキュメンテーション」と記す。）を中心に取り上げ、この方法について考察を深め、小学校教育における子どもの成長を見取り子どもの思考や学びのプロセスを認知することのできる教育的効果について明らかにしていきたい。

## Ⅳ．教育学的ドキュメンテーション

ここまで、レッジョ・エミリア・アプローチの思想や、エマージェント・カリキュラムの十分な理論を構築するための捉え方について整理してきた。このように、レッジョ・エミリア・アプローチは、エマージェント・カリキュラムを基盤としながら、常に臨機応変な教育実践が求められるアプローチであるといえる。

ここからは、教育学的ドキュメンテーションの方法を取り入れた実践事例を記載し、その具体から教育学的ドキュメンテーションがどのように、小学校教育における子どもの成長を見取り子どもの思考や学びのプロセスを認知することができるのかについて明らかにし、与えられた教育的効果についての考察をしていきたい。

### １．教育学的ドキュメンテーションとは

Wien は、「教育学的ドキュメンテーションとは、表面的に子どもたちが学校で何をしているか、何を考え、何を感じているかを、視覚的・文字的な形式（写真、子どもたちの言葉、作品例、教師の説明）で提示したものに見えるが、単に子どもたちが何をしたかを語ることではない。」という。教育学的ドキュメンテーションを活動に活用するためにはまず、教育学的ドキュメンテーションを使う習慣を身につける必要がある。子どもたちをよく観察し、写真を撮り、子どもたちが生み出した作品を研究し、子どもたちや他の人たちと共有するための資料を準備するなど、記録する習慣が身につけば、教師たちは、子どもたちの思考や世界（学びの道筋）についての理論を他の人たちにも見えるようにしようと、さらに記録を進めることができるようになる。学びを明示的に可視化するという考え方は、教師が自分の学習に対する概念を吟味し、計画と意思決定を評価することを要求することにもなる。他者と共有するための教育学的ドキュメンテーションの作成は、学術論文を書くのと同じくらい厳しいものであり、教師は、焦点を決め、長期実態記録の資料から焦点に合ったデータを選び、教授と学習の観点から何が起こったかを分析し、他者に伝えるためのレイアウトを準備しなければならない。教育学的ドキュ

メンテーションを作成することは単なる始まりにすぎず、教育学的ドキュメンテーションが意識的な教師研究一形態であるという解釈であり、教師は意識的に、世界についての子どもたちの理解のある側面や、子どもたちの思考を示すある方法を探究し、それを目に見える形にし、他者に伝えることを試みている。このような綿密な研究は、何を教えるべきか、学習のために何をデザインすべきかについての計画や意思決定に影響を与えている。

このように教育学的ドキュメンテーションは、子どもの思考や学習を可視化し、他者が解釈できるようにするための教師研究の方法論であると同時に、エマージェント・カリキュラムを計画するための方法論でもある。教師が子どもたちと一緒に記録を見直すことで、エマージェント・カリキュラムを促進させる効果が期待できる[14)]。

これらの教育学的ドキュメンテーションの効果が見られた Noula Berdoussis（以下、Noula とする。）のカナダの小学校での実践事例を取り上げ、教育学的ドキュメンテーションを活用することで、小学校教育における子どもの成長を見取り子どもの思考や学びを可視化することでそのプロセスが認知しやすくなるのかについて検討していく。

## Ⅴ．Noula の実践[15)]

### １．実践の概要

カナダのトロントの小学校１年生２０人（スリランカ人、パキスタン人、中国人、ベトナム人、ジャマイカ人、ラテンアメリカ人など多様な文化的背景をもつ子どもたち）を対象とする。活動の概要は、入学して間もない９月下旬から、Noula が初めて行ったディスカッションでの質問「もし本当に一つだけ願いが叶うとしたら、あなたは魚になりたいですか？」に対して、Jennifer が「私、ヒトデになりたいの。」と答えた一言をきっかけに、子どもたちは海の生き物についてのディスカッションを楽しみ始めた。それをきっかけに、ヒトデを中心としたディスカッションが深まっていき、ヒトデの生態についてディスカッションや表現を通して考えていく活動である。

### ２．実践の実際と結果

Noula はレッジョ・エミリアにインスパイアされたエマージェント・カリキュラムを始める準備をする中で、カリキュラムを後ろで静かに「待機」させながらペースを落として子どもたちを学習の中心に置いたらどうなるのか興味を持ちはじめた。そこで Noula は、一日の最後の１時間１５分、子どもたちに遊びの時間を与えることにした。この遊びの時間は、子どもたちの話を注意深く聞き、遊びのパターンを観察し観察メモを取るための窓となり、子どもたちが Noula の貝殻コレクションに夢中になっている様子に視点を当て、活動を展開した。ドキュメンテーションの導入として、子どもたちが作成するドキュメンテーションとして、彫刻（Sculpting）、絵画（Painting）、光を使って（Using light）、描画（Drawing）を活用した。子どもたちが作成するドキュメンテーションと教師が作成するドキュメンテーション（記録）を活用した。

**【初めての教室での議論】**

Noula：「もし本当に一つだけ願いが叶うとしたら、あなたは魚になりたいですか？」
Jennifer：「私はヒトデになりたいの。」
Terry：「いとこが、ヒトデの全身を切るとまた生えてくるって言っていた。ヒトデは決して死なないんだ。」

Noula は、子どもたちの様子を見て、教室の中を海の生き物になりきって移動させた。その時、Jennifer がカーペットに寝そべって星を作った。その姿にクラスの半数以上の子どもたちが、手を繋いだ。Terry と Jennifer は、ディスカッション、劇遊び、海の絵を描いた。絵を描いているとき Terry は、「クラスはとても盛り上がっていて、まるで誕生日パーティーのようだよ！」と発言し、活動が展開し始めた。

**【子どもたちは理論化し始める】**

Noula は、各ディスカッションの前に、大まかな指針になる質問を用意し、トピックに沿った会話になるよう穏やかに誘導した。

Noula：「海の生き物について何を知っている？」
Jennifer：「ヒトデは足が伸びるって習った。」
Austin：「もう一枚皮があって、それを押し出すのだと思う。」
Terry：「ヒトデを作ると、また足が生えてくるんだよ。」
Diljot：「足は勝手に伸びていくものだと思う。」

この会話から Noula は、子どもたちは理論的に考え始めたと読み取った。上記の子どもたちの予測は、ヒトデの足がどうやって生え変わるかを説明するために作られたものであり、理論的なものである。

**【最初の理論が理論を問いに変える】**

Noula は、Terry の理論「ヒトデの全身を切ると、また生えてくる」について取り上げた。

Noula：「ヒトデの足はどうやって生え変わると思う？」

Diljot：「貝殻がヒトデの足を傷つけると…ヒトデの足はまた伸びてくるよ。何かが皮膚のように押し出すんだ。骨が出てくるのかもしれない。」
Austin：「たぶん、皮が引っ張られるんだろうね。」
Diljot：「骨が押し出されて足になるんだよ。」
Austin：「骨はなく、ゼリー状だ。多分皮が剥けるんだ。」
Diljot：「ヒトデは知っているよね？ヒトデはどうやって生まれるの？ヒトデは卵を産むの？」

Diljot と Austin は、「骨はなく、ゼリー状である。」と「骨が押し出されて足に成長する。」という相反する説を唱えた。さらに、Diljot の「ヒトデはどうやって生まれるのか？」や「ヒトデは卵を産むのか？」という質問も刺激的で、Noula はその新しい問いを使い何ができるのか、どう子どもたちの思考をさらに刺激していくのかについて考えた。「傾聴の教育法」において重要な要素は、子どもたちの会話をゆっくりと聞き直すということであり、会話の直後に会話の内容を書き写す（記録する）ことは、子どもたちが何を考えていたかを振り返るのに欠かせないツールである。Noula は、子どもたちの問いのリストをチャート紙に記録し、翌日から教室に掲示した。チャート紙に記録した問いは以下の通りである。

・ヒトデはどうやって生まれるのか？ヒトデは卵を産むのか？
・ヒトデに骨はあるのか？
・ヒトデは切られた後、どうやって動けるのか？
・ヒトデはどのように移動するのか？
・ヒトデの体はどうやって元に戻るのか？
・ヒトデは死なないのか？

**【Diljot の問いかけからグラフィック表現へ】**

Noula は、Diljot の質問に強い関心を抱いている子どもたちを、少人数のグループに分け、議論することにした。

Noula：「ヒトデはどうやって産れるのか？」
Diljot：「ヒトデは自分で育つか、神様が与えてくれるんだ。卵はボールのように見える。たぶん神様が卵を投げ落とすか、別のヒトデが卵から引っ張り出して、割れるんだ。そうするとまた卵が産まれて、どんどん大きくなって、また卵を引っ張り出すと思う。」
Terry：「ヒトデが産まれると、卵を産んで、それが割れて大きくなるんだ。そうするとお父さんとお母さんは必要なくなる。そしてまた卵を産む。それを繰り返すと思う。」
Shaun：「僕と Diljot は、この本[16]でヒトデが卵を産むことを知ったんだ。」
Diljot：「そう！口から産むんだよ！」
Shaun：「本の中では、あの赤いヒトデについて実際に言っているんだ。ヒトデは腕を伸ばしている。何かに食べられているから、腕が伸びているんだ。骨が押し出されすぎているんだ。」
Noula：「あぁ…。あの絵の中で起こっているのはそういうことなんだ（子どもたちが「伸びるヒトデ」と呼んでいる、足が一本長いヒトデの絵のこと）どうなっているのかな？」
Diljot：「どれだけ食べるかで大きくなる。一口食べれば少ししか成長しないし、たくさん食べれば大きな足になるのだよ。」
Terry：「サメがヒトデの足を食べると、ヒトデの足は長くなるのだね。」
Noula：「どうしてどうなるの？」
Terry：「どうしてだろうね。たぶん、もう少しパーツがあって、それが伸びて長くなってくのだと思う。」
Noula：「今日、絵を描いているときに見せてくれる？」

Noula は Shaun が、ヒトデが「伸びているのは…何かに食べられたからだ。」と推論したことに驚いた。その後の活動で Diljot は、絵具という媒体を通して、“ヒトデはどうやって生まれてくるのか？”という疑問を明確にするために、自分の理論を何層にも積み重ね思考を深めた。その絵は、腕が切れたようなヒトデと、遠くにサメがいて、切り裂かれた腕から、まるで何かが再生するかのように外をむいた矢が描かれた絵であった。その絵を写真に撮った後、絵の説明を求めると、「ヒトデの吸盤は毒で、サメが死んでいくのはヒトデの吸盤を食べてしまったからだ。」と答えた。Noula は、理論を表現に変換するために必要な認知的思考と理解を認識していたから、Diljot が自説を凝らしていることに気が付くことができた。

**【子どもの理論を可視化する】**

プロセスと内容という二つの側面をもっているところが、教育学的ドキュメンテーションの特徴である。プロセスとしての教育学的ドキュメンテーションは、教師の継続的な計画に役立ち、また新たなカリキュラムの形成にも役立つ。これまでの活動をとおして、Noula は子どもたちの学びを可視化しようとしたが、蓄積してきた記録をどう並べたらいいのか分からなかった。そこで教育学的にドキュメンテーションを取り入れた。ポスターサイズのブリストルボード[17]を使い、全記録、ドラマチックなロールプレイの写真、会話の記録、簡単な解説など、その日のストーリーを並

べ、ドキュメンテーションの活用について検討した。深く検討した結果、４度目の挑戦の時には、Diljot の問いに焦点を絞った。その焦点は以下の３点である。

① Diljot のヒトデ起源説と骨説に関する刺激的な会話の断片。
② Diljot が描いたヒトデの神の起源を描いた二枚の写真。
③ 展開される学習に意味をもたせようとした教師の振り返り。

また Noula は、Austin の Diljot の説に対する反対説を必ず取り入れた。

この３つの焦点に絞ったところで Noula はドキュメンテーションの内容をドキュメント・ストリップと呼ぶものにアレンジした。このストリップは、子どもたちの理論や学習における変化を際立たせるために、必ず必要なコンテンツは何か考えさせるものになった。

**【子どもたちのドキュメントと理論の変化】**

Noula は、子どもたちの調査上の疑問点を解明する機会を提供したいと考え、子どもたちと共にクリップボード、紙、鉛筆、カメラ、日記などの記録道具をもって、生きたヒトデがいるペットショップを訪れた。子どもたちには、面白いと思ったものをなんでも記録するように呼びかけた。

はじめの２０分ほどはチョコレートチップのヒトデを持たせてもらったり、さまざまな海の不思議を見て興奮したりしていたが、その後の２５分間は、落ち着きを取り戻し、完全に自主的に観察描画に没頭していた。その後の数日間、子どもたちはペットショップでの自分たちの経験や個人的な体験を共有し合っていた。その姿から Noula は、また少人数のグループディスカッションを開き、子どもたちが何を学んだのか尋ねた。

Diljot：「オニヒトデは毒をもっていない、吸盤でくっついているんだ。」
Shaun：「毒がなかったとしても、怖かったよ。男がそれを（僕の手に）置いたとき、（ヒトデが）落ちそうになったんだ。そして、その人はそれが殻の中に入ると言ったんだ。」
Noula：「殻に閉じこもる？どういう意味？」
Shaun：「亀のように甲羅がある、という意味なんだけど、それはヒトデについて学んだことで、僕は知らなかったんだ。」
Jennifer：「今日はそれを描いてみようと思うの（伸びるヒトデの絵を指して）。ヒトデが足を伸ばしているでしょう。」
Noula：「なぜ伸びるのですか？」
Diljot：「僕が言った、ヒトデはサメに腕を食べられて大きくなり、２本の腕がくっついて大きくなる。骨が成長するんだ。」
Noula：「ちょっと考えてみましょう。ヒトデに骨はありますか？」
Diljot：「それが私の疑問です。」
Shaun：「いいえ！彼らには骨がないんだ。骨はないんだ。」
Jennifer：「Shaun のいう通りだと思う。ヒトデの中には何も入っていないよ。出てくるのはネバネバしたものだけ。じゃあ、貝殻は骨っぽいんだね。」
Terry：「ヒトデは外側が殻で、内側が体なのかもしれない。殻がヒトデを守っているのかもしれないね。」

この会話から、貝殻というアイディアを検討し、それまで受け入れていた Diljot の理論から徐々に離れていくにつれ、考え方に変化がみられるようになった。Diljot は徐々に Shaun の理論を受け入れ、自身の骨理論は捨て、検証するために十分な情報を集め始めた。これは Diljot にとって大きな思考の動きであり、変化である。しかしまだ、ヒトデの足がどうやって伸びるのか Diljot はその理論をはっきりさせられていない状況にいる。

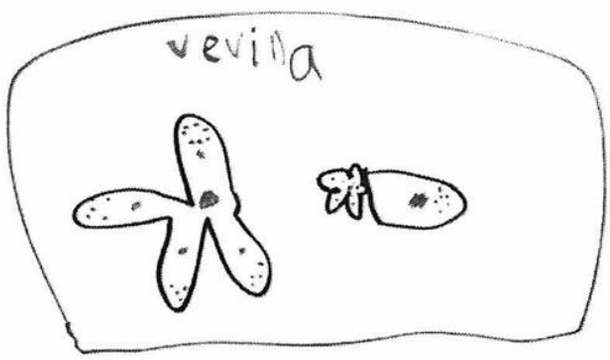
**【グラフィック表現で理論が明確になる】**

Noula は、ペットショップに出かけて発見したことを強調した新しいドキュメンテーション・ストリップを Terry の新しい理論に焦点を当てながら作成した。

Terry：「ヒトデを切ると、そこからまたヒトデが生えてくる。腕や足を切ると、そこからまたヒトデが増える。とても興味深いことだ！オニヒトデを全部バラバラに切ると、すごく大きくなるよ。」
Noula：「ヒトデの腕が５本あって、５本とも切断されたら、それぞれの腕がヒトデに成長するってこと？」
Terry：「そう、腕が全部切れたヒトデは伸びるんだ。ヒトデは決して死ぬことはない。足を無駄にすることはない。」

ストリップを使うことで、既存のストリップに将来のドキュメントのレイヤーを追加できる可能性が広がったと言える[18]。教育学的ドキュメンテーションがいかに会話を誘発し、その結果、子どもたちが明確さと理解を求めて知識を共構築することができるかという核心を突くことが明らかとなった。また、このやり取りの時、黙って聞いていた Vevina が立ち上がり、Terry のアイディアを描くと言って、ホワイトボードに向かった。Vevina の図には２匹のヒトデが描かれている。（図１参照）

（図１）Vevina の「ヒトデの成長過程」




カットしたエイから新しいヒトデが再生する様子を示している。）

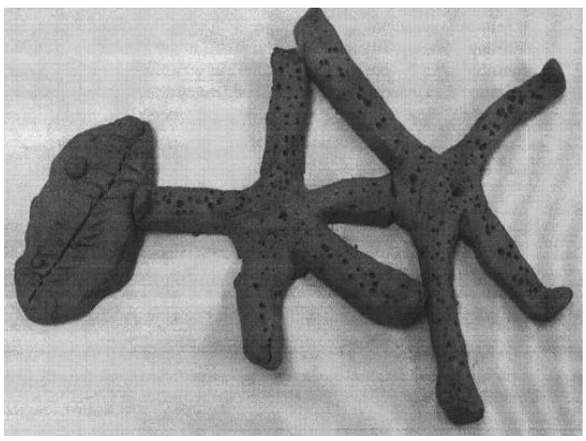
そこには、腕が切断されたヒトデの成体で、その切り落とされた腕からは、ヒトデの赤ちゃんが生えていた。これは、「伸びるヒトデ」の新たな姿である。Terry の理論が視覚的に表現され、子どもたちが Diljot のはじめの問いの理解に少しずつ近づいている姿を認知できた。この会話から１週間後、子どもたちの理論はさまざまなグラフィック言語[19]を通じて豊かに表現された。Diljot は、ヒトデの本を描き、本を通してヒトデの赤ちゃんがどのようにして産まれてくるのかについての持論を述べた。（図２参照）

（図２）Diljot の「ヒトデの生まれ方」

Diljot の理論は、オニヒトデの二重生殖の性質を表現しようとしたもので、豊かで複雑かつ科学的な方法で組み合わされた、共構成の認識の構成であった。また、Valeska は、粘土を使って細かいヒトデを作った。普段は物静かな子どもで、ディスカッションの最中に自分の理論を口に出すことはほとんどなかったが、粘土でヒトデを作ることで思慮深く表現した。その作品は、まず細かいヒトデを作り、卵の近くに、まるで卵から出てくるかのようなヒトデの赤ちゃんを作った。（図３）

このように、子どもたちが自分たちの理論を表現し続け、エキサイティングなことが展開されていった。

（図３）Valeska の粘土による「ヒトデの誕生」



**【実践の検討】**

本実践事例において、レッジョ・エミリア・アプローチの教育者たちが子どもの理論に言及するとき、子どもたちの予測、仮説、あるいは子どもたちを取り巻く世界を説明し、意味を与えるために作り出される考え方のことだと Noula は解釈していたといえる。レッジョ・エミリア・アプローチの教育者たちは、そのような理論は絶えず練り上げられ、練り直され、子どもたちが明確さを求めていく中で、プロジェクトの過程で進化していくものであり、そのような理論は暫定的なものであて、固定的なものではないという。

子どもたちの会話の直後に教師が会話の内容を書き写す（記録する）ことは、子どもたちが何を考えていたかを振り返るのに欠かせないツールであり、それを通して、どうすれば子どもたちの思考をさらに刺激することができるのか分からない自分に気が付くことができることが明らかになった。

また Noula は、理論を表現に変換するために必要な認知的思考と理解を認識していたから、Diljot が自説を凝らしていることに気が付くことができたといえる。そして、子どもたちの表現が子どもたちの思考の入り口であると考え、ドキュメンテーションを活用したことで、子どもたちの理論の進化を追うことに成功し、子どもたちの理論が明確になるにつれ表現も明確になり、グラフィック言語を使うことでヒトデに対する理解が深まっていくことができたといえる。これらのことから、遊びの中の子どもの興味（貝殻屋）が、専門的な探究（ヒトデの繁殖能力とういう生物学的探究）へと私たちを導いてくれる可能性が明らかになった。

このプロジェクトの間、Noula は従来の教えるという定義に挑戦した。教えるということは、知識を伝達するということではなく、むしろ子どもたちと新しい関係を築き、相互関係に基づくものである。Noula の新しい教師の定義によれば、教

師は注意深い観察者となり、聞き役となり、寛大で柔軟な時間的余裕を提供し、批判的思考と推論を促すような、より高度な質問を通して子どもたちの思考を刺激する必要があるといえる。また、子どもたちの思考をサポートするためには、教室の環境を検討しながら構成する必要がある。教師という役割が再定義されたことで、子どもたちはエマージェント・カリキュラム（共同構築されたカリキュラム）の中で、活動の主役として登場することができた。

あらかじめ設定された時間軸の中で期待されることのリストに従うことで、自分がどこに向かっているのか分かり、教師は安心感を得られる。しかし、安心感に頼るのではなく、不確実性な部分を受け入れることが重要である。不確実性は教師を立ち止まらせ、内省させ、教室で何が起きているのか、どうすれば子どもたちをよりよくサポートできるのかを問い直すきっかけとなる。立ち止まってゆっくりと考えることで、次の活動の展開やカリキュラムの方向性が明確になるといえる。Noula の実践は、教師はゆっくりとその道を切り開き、どこに向かっているのか定かではない中、常に勢いをもって前進することで、想像もしていなかったような場所に辿り着ける可能性が明らかになった一例だといえる。

## Ⅵ．おわりに　―成果と課題―

### １．成果

以上、レッジョ・エミリア・アプローチの歴史的変遷と、エマージェント・カリキュラム構成要素の一つの特色である教育学的ドキュメンテーション活用の実践という、より複雑な文脈において乗り越える実践例について検討してきた。教育学的ドキュメンテーションを活用したことで、子どもたちの思考を可視化することができたといえる。教育学的ドキュメンテーションの一種の方法を継続して活用するだけではなく、多くの方法を柔軟に活用し、その蓄積されていく記録を見返すことで、より明確に子どもたちの思考を把握でき、その疑問や関心の所在や、そこに至るまでのプロセスを認知できることが明らかになった。

この方法は、子どもたち自身が、自分たちの思考や学びのプロセスを振り返るためにも有効であることが明らかになったが、教師がどうしたら子どもたちの思考を刺激し、深い学びへと繋げられるかに行き詰ったとき、大きなヒントを与えてくれることも実践から感じられた。教師が、子どもたちが何を考えていたかを振り返るのにも教育学的ドキュメンテーションは欠かせないツールであることが明らかになった。

### ２．今後の課題と方向性

実践検討から教育学的ドキュメンテーションがどのように、小学校教育における子どもの成長を見取り子どもの思考や学びのプロセスを認知することができるのかについて明らかになってきた。教育学的ドキュメンテーションを活用することで与えられる教育的効果について、教育に与える影響は大いにあることが明らかになった。

しかし、我が国の小学校教育において、教育学的ドキュメンテーションを活用している学校はあまり見られない。その原因の背景として、子どもたちの思考を把握でき、疑問や関心の所在を認知できる方法があってもうまく活用できる教師がいないことが課題の一つであるといえる。また、Noula の教師の定義によれば、「教師は注意深い観察者となり、聞き役となり、寛大で柔軟な時間的余裕を提供し、批判的思考と推論を促すような、より高度な質問を通して子どもたちの思考を刺激する必要がある」が時間的な余裕がもてるカリキュラム構成や、教師が注意深い観察者や聞き役になれる環境にないことも懸念される。

さらに、あらかじめ設定された時間軸の中で期待されることのリストに従うことで、自分がどこに向かっているのか分かり、教師は安心感を得られる、その安心感に頼ってしまい、不確実性な部分を受け入れられずにいる教師も存在することが懸念される。教育学的ドキュメンテーションを活用するとなると、活用のためのプロジェクト活動を、新たに考えなければならないという懸念も残る。

今後、教育学的ドキュメンテーションや、それに類似する方法論がどれだけ我が国の教室に根付いているのか、その実態を把握する必要がある。我が国の文化、言語、場所、時間に合った方法で、新たな活動を考えなくとも、日常の教科を含めた学校生活においてドキュメンテーションを活用することで、学びや成長を可視化し、小学校教育における子どもの成長を見取り子どもの思考や学びを可視化することでそのプロセスが認知しやすくなるのかについて検討を深めていく。そのために、日常の教科を含めた学校生活の中に教育学的ドキュメンテーションを活用した実践を行い、実践と検討を通して、日常の学校生活の中でも活用できること、小学校教育における子どもの成長を見取り子どもの思考や学びを可視化することでそのプロセスが認知しやすくなることを証明していく必要があるだろう。

**【註】**

1）田中道弘　「日本人青年の自己肯定感の低さと自己肯定感を高める教育の問題　―ポジティブ思考・ネガティブ思考の類型から―」『自己心理学研究』第７巻　2017 年

2）文部科学省「中央教育審議会　教育振興基本計画特別部会（第７回）議事録・配布資料［資料３－１］」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo7/shiryo/07081503/003.htm
2024 年 2 月 20 日所在確認。

3）Carla Rinaldi　『レッジョ・エミリアと対話しながら　－知の紡ぎ手たちと町との学校－』ミネルヴァ書房　2019 年 9 月 10 日　p.3 L.15-17

4）Carol Anne Wien (ed), *Emergent Curriculum in the Primary Classroom; Interpreting the Reggio Emilia Approach in Schools*, NAEYC,2008.の第１章“Emergent Curriculum”や第 8 章“The Stretching Starfish Children’s Theories”を基本資料とする。

5）神谷潤　「小学校高学年における「ドキュメンテーション」の検討　―てつがく創造活動の実践として―」　お茶の水女子大学附属小学校研究紀要　2022 年　p.42

6）レッジョ・エミリア・アプローチの中心にあるのが、『子どもたちの 100 の言葉』のマラグッツィの言葉（詩）である。子どもたちは 100 の言葉を持って生まれると言われているが、学校や社会によって、その言葉のうち 99 は奪われてしまうと警鐘を鳴らされている。子どもたちの可能性を奪わないために、教育上、最も重点が置かれている分野が「アート」である。レッジョ・ エミリア・アプローチの更なる普及を目指して、2006 年にローリス・マラグッツィ国際センターが設立された。文化、思想、年齢、国籍を問わず、全世界から幼児教育の研究発展を目指して、多くの研究者たちがここに集まってくる。アトリエスタと呼ばれる美術を専門とする先生が、アトリエでの子どもたちの創造活動のサポートを行うセンターのことである。
関エレナ「人を中心に考え、無限の可能性を引き出す～レッジョ・エミリア・アプローチに学ぶ、伸びやかな子ども目線の生かし方～」蛭子彩華編『MARKETING HORIZON』日本マーケティング協会、2023 年 6 月号
https://horizon.jma2-jp.org/?p=1625
2024 年 2 月 20 日所在確認。

7）Carol Anne Wien *Emergent Curriculum in the Primary Classroom Interpreting the Reggio Emilia Approach in Schools*,2008, p.1-2.

8）*Ibid*, p.2-3

9）*Ibid*, p.5

10）*Ibid*, p.6

11）*Ibid*, p.6

12）*Ibid*, p.6

13）*Ibid*, p.7-8

14）*Ibid*, p.9-10

15）*Ibid*, p.96-110

16）「この本」とは、Rebecca Stefoff, *STARFISH*, Benchmark Books,1997.のことである。

17）一般的にブリストルボードとは、コーティングされていない機械仕上げの板紙のこと。この名前は、多作の美術収集家である第４第ブリストル伯爵フレデリックハーベイにちなんで命名されたものである。

18）ストリップとは、事実や思考を、５Ｗ１Ｈを基準として整理することであると解釈する。事実や思考に合わせて、そのレイヤーを追加したり変更したり、オリジナルのストリップを作成することができると解釈した。

19）一般的に、グラフィック言語（graphic language）とは、写真、イラスト、図形、記号、文字などの視覚的に訴えることのできる言語である。